

# 書斎の静寂のユートピア

——共同生活をした引きこもりというグリム兄弟像について——

小林 将 輝

## 1. はじめに

ヤーコプ・グリム (Jacob Grimm, 1785-1863) とヴィルヘルム・グリム (Wilhelm Grimm, 1786-1859) は、1812年に出版した『子どもと家庭のメルヒェン集』、通称「グリム童話」によって一般によく知られている。この「グリム兄弟」に関する研究においては、「グリム童話」自体の研究並びに兄弟が関わってきた学問分野内での研究に加えて、この兄弟自身の伝記的な事柄についても、これまで長い間、研究上の多くの関心を集めてきた。そして、その成果は伝記や個別の研究などで広く公表されてきた<sup>1)</sup>。ところで、そのような伝記的資料や研究においては、兄弟の人物像を語る際に、二人が精神的に密接に結びついた関係を強調する傾向があった。そして、その仲のよい兄弟が同じ部屋で机を並べて座り、外にも出ずに黙々と研究に打ち込んだ学究の徒といったようなイメージで語られる場合が多々見られる。とりわけ「交際嫌い」<sup>2)</sup>のヤーコプにそれはつきまとうイメージであると言えるだろう。このような兄弟像の形成の背景には、手紙や自伝的記録における兄弟自身の発言内容が基盤となっており、そこから伝記などのメディアに仲介され、広く流布することになった。しかし、このような兄弟像はいかなる根拠から成り立っているのだろうか。兄弟愛ゆえに離れ離れにならないことを決意した兄弟、一人は引きこもりで非社会的なヤーコプ、他方は快活で人付き合いの良いヴィルヘルムといった紋切り型の兄弟像で語られる傾向がそこにはあるように思われるのである。兄弟像のありようについては、この兄弟像の成立の背景に関わる資料を詳しく見てみることで、より厳密に見ることができのではないだろうか。

本論は、グリム兄弟の離れ離れにならないという兄弟愛に基づいた共同生活の問題、またヤーコプ・グリムの非社交性の問題に焦点をあてて、その実態を明らかにすることが目的である。そのさい、伝記的文献での兄弟の取り扱われ方を確認したうえで、兄弟の青年時代の手紙のやり取りを資料に用いながら、本人や周辺がどのような発言をし、どのように振る舞っていたのか追っていく。それにより、グリム兄弟像の再検討を試みるものである。

## 2. グリム兄弟の共同生活の問題

### (1)「離れ離れにならない」という兄弟像の成立の背景

#### ①成立の背景

本章では共同生活の問題とヤーコプ・グリムの非社交性の問題という二つの問題のうち、まず共同生活の問題について取り上げる。常に一緒にいて、離れ離れにならなかった兄弟像の形成の根拠となる兄弟自身の発言内容について確認し、その後、それによってつくられてきた伝記上のイメージについて確認してみよう。

グリム兄弟の伝記に関わる研究や文献資料は多くあるが、伝記においては、兄弟自身が著した「公式」の証言として、「自叙伝」が第一に参照されている。兄のヤーコプ・グリムの自叙伝において、兄弟の強い結びつきを象徴的に表している言葉としては、「いつも一つの部屋に暮らし、一つのベッドで寝た」<sup>3)</sup>ヴィルヘルムと離れることになったことが悲しかったと語った一文がある。これは、ヤーコプが大学に入学するために、ヴィルヘルムを残して町を移り、一年間離れ離れになったことについて触れた発言である。また、ヤー

コブがヴィルヘルムの死亡後に行った講演においては、この一文を長くしたバージョンで二人の共同生活が描かれ、亡きヴィルヘルムが偲ばれることになる<sup>4)</sup>。そこでは、二人の共同生活の様子は時代ごとに変化し、例えば、最後のベルリン時代では部屋は二つになったものの、兄弟が常に同じ屋根の下で一緒に暮らしていたことや所有物を共有して使っていたことが印象深く語られる。

自叙伝や講演は一般に向けられたものであるが、プライベートのやりとりである手紙においても、この種の事例を多く挙げるができる。特に近年では、手紙の研究が進められることで、兄弟のパーソナリティはいつそう追及されやすくなった環境にあると言ってよい。ヤーコブはマールブルク大学の学生時代であった1805年1月27日にパリへ向けて発っている。これはマールブルク大学教員であったフリードリヒ・カール・フォン・サヴィニーの求めに応じて、パリの帝国図書館で文献調査を手伝うため、ヘッセン国を離れたのである。帰国したヤーコブがマールブルクに到着し、ヴィルヘルムと再会するのは10月13日であるから、およそ8か月半、兄弟は離れて暮らすことになるが、この時期に互いにやり取りをした手紙では、相手への愛情が憚ることなく述べられている。例えば、ヤーコブと別れてからすぐにかかれた1805年2月2日のヴィルヘルムの手紙では、以下のような箇所が見られる。

最初の日々について僕はなんて言っているかわかりません。僕はとても悲しかったと、今でも泣きたい気持ちになります。兄さんが行ってしまった時、胸が張り裂けるほどで、堪えられませんでした。きっと兄さんは、僕がどれほど兄さんを愛しているかなんてわかっていないでしょう。<sup>5)</sup>

古くは「恋人同士のやさしい情熱」と評されたこの部分は<sup>6)</sup>、兄弟の互いの深い結びつきを表した言葉でとしてしばしば引用される。1796年、それぞれ11歳、10歳の時に父親を亡くしたグリム兄弟は、グリム家の長男と次男として、一家を支えて

いく責任を負った。将来一家を経済的に支える職につくことが2人の目的となったが、それを実現する高い教育を受けるために、1798年に少年時代を過ごしたシュタイナウを離れて、ヘッセン国の首都カッセルで高等中学校に入学した。この時、家族と別れて二人だけで暮らすことになる。高等中学校を卒業した後、大学に進学するために、ヤーコブが1802年、ヴィルヘルムが1803年にマールブルクに移ることになり、1年間別々に暮らしたが、1803年以後は再び二人だけで暮らしている。二人は一家の将来を常に案じ、また、家族や親せき連中も同様に、グリム家の子供たちの中でも特に優秀な長男と次男に一家の将来を託したのである<sup>7)</sup>。こうした固有の家庭環境も、二人が精神的に強く結びついたことの背景として見なしうる。そして、上の引用と同じ文脈で、以下の一文もグリム兄弟の兄弟愛を伝える一例としてしばしば引用される。上述のヤーコブのパリ到着からおおよそ5ヶ月後の7月12日の手紙である。

僕たちがこのようなやり方を続けて行けば（計画が重要であること、これは確かに真実だ。サヴィニーはこれをとっくの昔に言っていた）、いつかはかなりの文献を集めることになるだろう。そして僕たちは将来、もう少しそれにお金をかけることができるようになり、いつも一緒になってそれに取り組むだろう。というのは、愛するヴィルヘルムよ、僕たちは決して離れ離れにならないようにしよう。仮に誰かが僕たちの片方をどこかへやろうとしたら、もう片方がすぐその話を取り消さないとならない。僕たちはこの共同生活にすっかり慣れてしまったので、離れることは僕を死ぬほど悲しくさせるのだ。<sup>8)</sup> [下線部は筆者]

兄弟の強い結びつきは、「僕たちは決して離れ離れにならないようにしよう」というこの一文によって、二人の共同生活という具体的な形を取ったように見える。この後、兄弟はカッセルで司書として暮らし、ゲッティンゲンで大学教授になり、再びカッセルで暮らした後、最後はベルリンに移

って生涯を終えるが、この間継続して共同生活を続けている。これは、カッセルで親元を離れて高等中学校に通った時代（1798年）からヴィルヘルムが死んだ年（1859年）までを換算すると61年という長い期間になる。これほどの長い間、基本的には同居し続けたという事実は<sup>9)</sup>、私たちに否が応でもこの発言を意識させるものである。ヴィルヘルムは1825年に結婚し、他方ヤーコブは生涯独身であったものの、ヤーコブはヴィルヘルムの一家と共に同じ家で暮らし続けたのである。

カール・ツックマイヤーは、「不思議なことに、彼らはこの引き離すことのできない共同生活を送ろうという決心を、彼らの全生涯において本当に実践したのである」<sup>10)</sup>とこれを評したが、これはグリム兄弟を語る上での伝統的なクリシェの一つであると言えるだろう。ツックマイヤーに代表されるように、グリム兄弟の伝記の著者たちは、多かれ少なかれ、このような調子を含んだグリム兄弟像をこれまで提供してきた。例えば、ガブリエーレ・ザイツによる比較的新しい伝記では、ヤーコブとヴィルヘルムは「子供の頃から並外れて深い内的な愛情で結びついていた」とし、「彼らの人生行路は初めから終わりまで一緒であった」というように、兄弟愛と共同生活を結び付けて語っている<sup>11)</sup>。このような兄弟像には、ヴィルヘルムの息子ヘルマン・グリムによる父ヴィルヘルム及び、共同生活をしていた伯父ヤーコブの思い出の記録なども、大きく寄与してきたと言えるだろう。ヘルマンは「子どもと家庭のメルヒェン集」の序文に書いた、よく知られる文章において、ゲッティンゲン時代に住んだ家にあった肖像画の掛けられた書庫とゲーテの彫像が置かれ、花が飾られた二人の仕事部屋を思い起こしている。二人が熱心に机に向かい、本を取り扱うその仕事部屋には「聖なる静寂」が支配していたという<sup>12)</sup>。本に囲まれた落ち着いた研究者の理想郷として、その部屋は語られるのである。

## ②共同生活と本の収集の問題

しかしながら、こうした言わばロマンチックな

兄弟像は、近年ではさすがにトーンダウンし、対象への心理的な距離を保って語られている。最新の伝記の一つを書いたシュテッフェン・マルトゥスは、「僕たちは決して離れ離れにならない」という発言について、この決意がヤーコブとヴィルヘルムを「ドイツ文化のアイコン」にしたと述べ<sup>13)</sup>、これが一般の目を引いたものになったこと、また、その後の兄弟像の解釈へ大きな影響を与えたと見なしている。しかしマルトゥスは、ヤーコブのこの発言が、兄弟の本の収集欲と結びついていることが見落とされていると指摘する。兄弟二人きりの共同生活への決意は、「二人が本への欲求をどうしたら最大限に満足できるかという熟慮によって縁どられている」<sup>14)</sup>のである。すなわち、二人が一緒に住むということは、兄弟愛の実践を実現すると同時に、本を理想的に収集することを実現することでもあったということになる。

先の引用を再度確認してみよう。引用の後半の調子だけに注目してしまうと、単なる弟への熱烈な愛情の吐露に思えるが、前半部分では確かに本の収集の話をしているのがわかる。5月17日、ヤーコブはサヴィニーとライプチヒで行われる書籍の見本市カタログを見て<sup>15)</sup>、そこに掲載されているゲーテが翻訳したディドロの『ラモアの甥』、そしてゲーテが編集をした『ヴィンケルマンとその世紀』などの幾つかの書籍について、ヴィルヘルムにマールブルクの書店で調べてほしいと頼んだ。それに対して、ヴィルヘルムはしばらくしてその調査結果を知らせるが、なかでもゲーテの書籍についての情報はヤーコブを喜ばせ、是非入手したいこと、併せてヴィンケルマンの書簡集、また『古代美術史』の入手も考えなくてはならないと伝える<sup>16)</sup>。そうして引用の冒頭、「僕たちがこのようなやり方を続けて行けば」に続くのである。

さらに見ていくと、引用の直後では、「——しかしあまり感動的にならないように、僕が君に言いたかったのは、競売目録を何とかして手に入れようということだけなのだ」<sup>17)</sup>と述べられ、その後は本の入手に関する話が続き、本の値段や相場の話に移っていく。「あまり感動的にならないよ

うに」という言葉が示しているのは、共同生活の話は本来の話の文脈から脱線した話題として扱われているということである。

## (2) グリム兄弟と本

### ①所有対象としての本

グリム兄弟と本の収集という点について注目してみると、このパリ時代の手紙のやり取りにおいては、本は中心的な話題であったということが見えてくる。兄弟の書簡集には、この時期の手紙として30通が収録されているが、これらの手紙を通してみていくと、二人がどれだけ常に「本」について話題にしていたかということがわかる。彼らは「文芸ニュース」と称し、当時話題になっていた出版物や、それに対する批評家たちの書評、著名な作家たちの動向、兄弟のお気に入りの作家たちの作品についてお互いに書くことで紙面の多くを費やしている。読んだ本について何か意見を述べたり、文壇の事情などに熱心に関心を向けたりするこのような傾向は、すでにヤーコブがマールブルク大学に入学した1802年から見られるものの、その時代と比べると、この時期には話題の対象となる文献の幅はかなり広がっている<sup>18)</sup>。これにさらに書籍の見本市で取り扱われる古書、競売情報が加わり、また、稀覯本や研究のための専門書にも注意が向けられる。そのうえ本そのものの話題として、販売価格や版は当然として、本の判型や使用している紙、注文後の製本のさせ方などの印刷・製本形態にまで言及される。そのような情報交換と議論を通じて、兄弟は、めばしい本をピックアップし、購入計画を立て、その計画を実現していくのである。

確かにそれ以外の話題もある。兄弟が離れ離れになった当初は、互いへの愛情のこもった発言、特に上で見たように、主にヴィルヘルムによるパートナー不在の寂しさがつづられたセンチメンタルな内容も見受けられるが、二人の別居期間が長くなるにつれ、次第にこのような調子は影をひそめるようになる。また、ヤーコブが外国のフランスに行ったということから、パリまでの道中の様

子、パリの街並み、フランス人やフランスの文化、それらとドイツとの比較文化論を熱心に論じるかと言えば、それほどでもない。母親と伯母に宛てた手紙及びその後のヴィルヘルム宛の手紙において、パリまでの旅程と道中について触れられ<sup>19)</sup>、その後、同じくヴィルヘルムに宛てた手紙において、パリの街並みの印象やフランス人について、また、美術館めぐりや観劇について語られるのは事実である<sup>20)</sup>。しかしそれらも最初に出された手紙において多く書かれ、後になるとこれらの話題は次第に減っていく。また、家族の消息を尋ねるようなこともそれほど頻繁には行われるわけではない。それ以外にも、例えば個人的なこととして、ヴィルヘルムが友人との諍いを報告したもの、ヤーコブの手紙がヘッセンの宮廷で評価されたこと、サヴィニー一家の様子など、手紙というメディアの常として、その他の日常の出来事、生活の細事に関わることなどは幾らでも書かれているが、全体の割合から見ると決して多くはない。読者が期待するような兄弟同士のラブレターや、パリ旅行記はその全体の中のごく一部でしかなく、手紙の主要な内容は本の話題なのである。

こうして見てみると、この時期のグリム兄弟にとって、本とはどのような意味を持っていたのかということであらためて問う必要があるだろう。結論を先取りして言うならば、グリム兄弟にとって本は収集し、所有すべきものであった。言い換えるならば、兄弟のこの時期の主要な関心事は、「僕たちの蔵書」<sup>21)</sup>をいかに充実させるのかということであったのである。

そのような視点で見てみると、この時期の手紙においては、本の所有への欲求があからさまに語られている箇所を多く見出すことができる。例えば、ヤーコブは3月14日の手紙において、「たくさんの美しい本を買うこと、特に古い本を買う気持ちはとてもあるのだが、お金がごく僅かしかない」<sup>22)</sup>と述べ、書店が多く存在するパリにいながら、本を十分入手できない無念さをにじませている。また、4月21日の手紙では、「僕はこの数日というものとても幸福であった」とはじまる文章が

あり、それが何かと言うと、「最も美しい版ではないものの、ピートーの編集によるカノン法大全の一番良い版を5++（即ち2グルデン20クロイツァー）という馬鹿げた値段で手に入れたからだ」と続く<sup>23)</sup>。ヴィルヘルムが書いたものでは8月10日の手紙において、購入しようとしたシラーの年刊詩集を、知り合いに先に購入されてしまったことを苦々しく報告している箇所がある<sup>24)</sup>。

また、ヤーコブは書名を挙げ、それを入手すべきだとか、入手を決めた本に対し、購入が実行されたのかを頻繁にヴィルヘルムに問い、ヴィルヘルムは、その細かい要請によく応じているのがわかる<sup>25)</sup>。併せてヴィルヘルムは、「兄さんがパリで写本類の中に古いドイツの詩や文学を探すことができるのではないか」と図書館での調査を促し、兄弟の将来の活動へとつながるドイツの古い文献資料を収集する重要なきっかけを与えたことも、本の所有という点から見ると注目すべきであろう。加えて、互いに購入場所や購入機会を吟味して、どのような手段を用いれば最も購入額を低く抑えられるのかを真剣に検討し合う場面も見られるが<sup>26)</sup>、これも兄弟の本の収集に対する強い情熱を示している。

このように本への強い関心と所有欲が、手紙の多くの箇所でも様々な形で見られるのである。グリム兄弟の蔵書について研究をしたルートヴィヒ・デネケは、このような兄弟の若い時代の本への欲求を「並々ならぬ読書欲」と呼び、ヘルマンが、ヤーコブの今際の際に彼らの蔵書を散逸させないよう約束をさせられたエピソードを紹介している<sup>27)</sup>。ヤーコブが死んだとき、兄弟の蔵書は古書や稀覯本など貴重な本を多く含み、全体は8,000冊を超えていたとされるが<sup>28)</sup>、兄弟の本への所有欲は相当なコレクションを生み出したのである。

## ②美しい本と美しい並べ方への欲求

本の収集という点に関してもう一つ重要なことは、兄弟にとって本はただ集めればよいものではなかったということである。収集すべきは、兄弟

にとって関心がある本でなくてはならないのはもちろんだが、先の引用にあるように、それらは「美しい」(schön)本でなくてはならなかった。パリ時代の兄弟の手紙にある本に関する話題の中には、印刷、製本に関する話題など、本の体裁に関する話題が多く、本の外面的、美的要素についても高い関心があったことが見て取れる。例えば、ヴィルヘルムは5月28日付の手紙において「ノヴァーリスの作品集は、より美しい(schöner)判型、印刷、紙になるということは、まずないだろう、すべて、僕たちの持っている版のほうがとても感じがよく美しい(schön)」<sup>29)</sup>とあり、自分たちが持つ版の体裁の美しさが述べられている。続いて、8月10日のヴィルヘルムの手紙ではゲーテが翻訳したチェッリーニ自伝について同じように本の体裁について詳しく評価されているのを見ることができる。

チェッリーニは紙が薄いので、全然厚くない装丁になった。印刷は好ましく、だいたい『ホーラ』と同じようである。判型は大きく、美しい(schön)。そして巻頭に銅版画となっている表題紙と並んでチェッリーニの顔がある。リップスの作風でとても良い。僕はこの本の端を裁断させなくてはならなかった。なぜなら紙が薄すぎで、前の方が丸まっていたからだ。<sup>30)</sup>

やはりここでも「美しい」という言葉が出てきている。また、使われている紙、印刷、判型、表題紙の様子、本の仕上がりについても言及され、それどころか本を美しくするために業者に加工をさせているのもわかる。強い美的関心を持って本の体裁を見ていたことが窺えるのである<sup>31)</sup>。こうした「美しい本」への強い関心と志向は、ヤーコブが大学生として単身マールブルクに滞在していた1802年にすでに見られる。ヤーコブは、カッセル時代の学友パウル・ヴィーガントへ宛てた手紙において、「読書について、僕はまったくあなたに賛成です。僕にとっても、一冊の美しい本は何か輝かしいものであり、常に渴望している癒しでも

あります」<sup>32)</sup>と述べられ、読書をしているとつい時間を忘れてしまうこと、本、銅版画、絵画なき人生は魅力がないということが述べられるのである。

さて、本の収集が高じ、本が増えてくると、次にそれらの本をいかに美しく並べるかということにも関心を向けられるのは必然であろう。兄弟はこの蔵書の所蔵の仕方という点においても、大きな欲求を持っていた。

兄弟の蔵書ということを考える出発点として、最初に挙げるべき重要なエピソードは、兄弟がサヴィニーの部屋に訪れ、その蔵書に接した以下のエピソードではないだろうか。1803年、マールブルク大学の学生としてサヴィニーの講義を受講したグリム兄弟は、優秀なレポートを書いたためサヴィニーに評価され、彼の家に通うことを許される。そこで「まぎれもない本馬鹿」<sup>33)</sup>サヴィニーの豊かな蔵書に触れ、本を借り出させてもらえるようになるのだが、その体験をヤーコブは後年、以下のように語っている。少し長いが重要な内容なのでここに引用したい。

しかしもっと私の心を捉えたものは、部屋にそそり立つ本棚と、その中に並べられた本でした。学校で使った本や父親が遺した蔵書を除くと、そこにあった本で私が知っていた本はごく僅かでした。本は普通に並べられていたのもありましたが、ヘブライ語が右から左に書かれるように、逆の順番で並べられていたのもありました。あなたがそのあべこべな並べ方について説明し、弁護するのを聞きましたが、その必要性が私にはどうにも納得できませんでした。私たちは、はしごを使って本に近づくことが許されていました。そこで私はこれまでお目にかかることのなかったものを見たのです。扉から入って右手の壁、ずっと奥のほうに、一冊の四つ折り本、ボードマーのミネリートの選集があったのを覚えております。それを私は手に取って、生涯で初めて本を紐解き、その場でヤーコブ・フォン・ヴァルテやクリスタン・フォン・ハムレーのページを立ったまま読みました。

添えられた詩はめったに目にしない半分理解不能な古いドイツ語で書かれていました。それは私の心を特別な予感で満たしました。もしかすると私がこの本を20回も通読し、決して手元から離さなくなるということなんて、当時、誰が私に言うことができたでしょう。<sup>34)</sup>

恩師の家を訪れ、これまで見たことのないような豊かな蔵書を前にして、幾つものタイトルを目で追い、目についた本を手取る。時計の針が止まったような、この読書の原風景とも言える過去の断片を、ヤーコブは恩師に捧げた文章で極めて巧みに表現している。グリム兄弟がパリ時代に構想した理想的な蔵書のあり方に、このサヴィニーの住居での体験が強く影響をしていることは想像に難くない。

蔵書の扱いという点から見ると、もう一点注目すべき内容がこの文章にはある。本の並べ方に言及している部分である。引用の前半部分では、サヴィニーが一部の本を逆に並べていたことをヤーコブは目ざとく指摘をしている。このことは兄弟が蔵書の並べ方に対して並々ならぬこだわりをもっていたということを意味していると同時に、自身の完璧な蔵書の取り扱いへの自信の表れとみることができるだろう。この文章は、ヤーコブがサヴィニーの博士号取得50周年に捧げる論文、「所有の言葉」の序文に書かれたものである。これを書いた1850年10月、ヤーコブは65歳であり、すでに自身の蔵書はくまなく整備され、管理も行き届いていたため<sup>35)</sup>、恩師の蔵書の取り扱いの非合理性について批判的コメントを差し挟む余裕がこの時にはあったのだらうと考えられるのである。

この文章は、兄弟とサヴィニーの初期の関係やヤーコブが将来のドイツ文学の研究へ至る背景を見るためにしばしば用いられてきた。例えば、両者の美しい師弟関係的な文脈で読み取られたり<sup>36)</sup>、ヤーコブがこの時の体験をきっかけにドイツの古い文学を集め、その研究をはじめることになったという文脈でも用いられたりしている<sup>37)</sup>。近年では、ヤーコブが中世の文学を発見し、それが「ゲ

ルマニスティックの創設」につながるという物語を作り上げた文章として、批判的に解釈された<sup>38)</sup>。しかし、兄弟の蔵書の整備への関心という文脈で再度見てみるならば、ヤーコブが恩師に捧げる文章において、蔵書の並べ方について、このように批判的に言及している点にも、あらためて注目すべきではないだろうか。

以上のようにグリム兄弟の蔵書への強いこだわりを、蔵書の並べ方というテクニカルなレベルでの彼らの関心から見ることはできたが、続けて蔵書整備に関わる事物への関心についても触れ、その強いこだわりを見ておこう。ヴィルヘルムの3月24日の手紙の後半部分には、以下のような一見ただけでは内容が把握しにくい箇所がある。

——僕たちの蔵書について、それ以外には特に何も思い浮かぶことはない。強いと言えば、新しいシュタウフファッヒャー (Stauffacher) が必要だ。パルマテルヒェン (Palmaterchen), コリドーン (Koridon), そしてタボレットヒェン (Taboretchen) を勧めたい。コリドーンは古くなり始め、脚が傷んでいる。<sup>39)</sup>

訳出するのが困難なこれらの名詞は、バイアラースポファンケンによる注釈によれば、マールブルクの学生時代に本の収集と並行して導入された、蔵書の設備、備品に関わる事物の名称だという<sup>40)</sup>。シュタウフファッヒャーとコリドーンは、歴史や神話の登場人物の姿をした胸像のようなもので、ブックスタンドとして用いられた可能性があること、また、パルマテルヒェンは学校教師が持つステッキ、タボレットヒェンはフランス起源の家具から来ており、小さな戸棚か椅子だと推測されている。本人たち、あるいはせいぜい身近な友人にしかわからないような特殊な用語を蔵書の設備に与えていたことは、蔵書への特別な感情を抜きにしてはありえない極めてフェティッシュな物言いだと見なせるだろう。ヘルマンは、晩年のヤーコブが蔵書を「一種の人格のように」<sup>41)</sup> 見なしたと証言しているが、このような蔵書への特別なこだわりが

いっそう進行していくと、やがてそのような感情を持つのに至るのかもしれない。以上の内容をまとめると、「僕たちの蔵書」は良質な本が揃っていればよいというわけではなく、本自体が美しくなくてはならない。そして、それらの美しい本がそれにふさわしい設備のもとで、適切に並べられていなくてはならないのである。

### (3) 共同生活と本の収集の問題の再検討

それでは、このような兄弟の蔵書への強いこだわりによってつくられる部屋はどのような部屋となるのだろうか。ヴィルヘルムは5月28日の手紙で、彼が住む下宿の蔵書が並べられた部屋の様子を以下のように報告している。

今日の夜、兄さんが僕のそばにいてくれたらいいのということだけを考えていた。部屋の中は、とてもすばらしく、静かで明るい。そして僕は（製本業者から）新しく来た本をどう書棚に並べべきかと頭を悩ませた。部屋の中は今、愛らしく見え、清潔で整然としている。なぜなら僕の所に人が来ることはめったにないからだ。ベッドはシュライトの部屋にあるのと同じようにカーテンがついている。そして窓辺の下には新しい、とてもかわいらしい暗い色のニスを塗った机があり、それには鍵をかけることができる引き出しがついている。椅子はどれもあるべき場所に置かれている。そして机の上には咲き誇るニオイアラセイトウの花が置かれている。すべてが兄さんを待っています。兄さんが蔵書室の扉を開けたら、僕を褒めてくれることでしょう。<sup>42)</sup>

整然とした部屋の全体像から、本棚の前で本の並べ方を思案しているヴィルヘルム自身が語られ、ベッドや机、椅子といった個別の事物に視点が移り、最後に机の上に飾られた花について述べられる。そこに帰国したヤーコブが、蔵書室を開けて弟を褒めるという、ヴィルヘルムの妄想が付け加えられている。物語の一場面のように語られるこの部分は、兄に宛てたプライベートな手紙であり

ながら、一般の読者にもその部屋とその部屋にいるだろう二人の様子を十分に想像させるものであり、また、ヴィルヘルムがこの部屋にかけける思いがよく伝わってくる文章だと言えるだろう。そして、自慢の部屋の様子を語るヴィルヘルムの寂しげだが晴れやかな調子は、本について語る時の研究者的な態度や、本に対するフェティシズム的な態度などが書かれた手紙の他の部分とはひときわ目立ったコントラストを描いているように見える。

さて、これまで長々と兄弟の蔵書に対するこだわりを見てきたが、本章の最初に触れた蔵書と同居という問題について、ここであらためて考えてみたい。先に挙げたヤーコブの「僕たちは決して離れ離れにならないようにしよう」という文章は、このヴィルヘルムの手紙から、約一カ月と少ししてから書かれることになる。ヤーコブがヴィルヘルムとの同居を要請することで念頭においていた理想は、結局のところヴィルヘルムが提示したこの文章にすべて先取りして集約されていると言えるのではないだろうか。つまり、蔵書のある理想の部屋と、それを共同管理するパートナーがワンセットであることが重要なのだということをこの引用は物語っている。そしてその理想的な生活のありようを、ヴィルヘルムの方で、このように豊かな描写で表現しているのである。

ヤーコブにとってヴィルヘルムは、本を収集する上で実務上、欠くことの出来ないパートナーであった。ヴィルヘルムは入手すべき本について相談をする相手であり、その入手に骨を折ってくれる人物であり、他に購入すべき本は何かと催促をしてくる、選りすぐりの蔵書をつくりあげるためになくてはならない存在であった<sup>43)</sup>。しかしヴィルヘルムは、実務的な役割以上に、ヤーコブの重要なパートナーであった。ヤーコブが本を収集する中で、その喜びや悲しみをわかち合う、感情を共有できる人間であったのである。貴重な本を思いがけず安価で入手した時の幸福を伝える相手であり、高く評価した本について、互いに論評し合える相手でもあった<sup>44)</sup>。そして自慢の蔵書がきれいに並べられた書棚に向かって、それに肩を並べ

て見入り、満足しあうことができる相手だったのである。

以上のように兄弟の本に対する態度、考えなどを総合的に見てみると、マルトゥスが指摘する、本を収集することと共同生活は一对のものと捉えることは納得できるものである。そして、これまで伝記作家たちによって、この部分が兄弟愛という要素だけが取り出され、鑑賞されてきた点は見直されなくてはならないだろう。しかしながらマルトゥスの言葉少ない解釈は、兄弟が本の収集を最も効率的に実現するために、共同生活をするという合理的判断をしたという意味合いもあるように取れる。もしそうであるならば、その点については議論の余地があるかもしれない。ヤーコブについてははさておき、少なくともヴィルヘルムは、兄の「僕たちは決して離れ離れにならないようにしよう」というメッセージを文字通りに受け止め、以下のように返答しているからである。

それ以外には、愛するヤーコブ、ずっと一緒に暮らしていくということについて書いてくれたことはすべて本当にすばらしくて、僕の心は震えた。そのことはずっと僕の願いであった。というのは、兄さんほど僕を愛してくれる人はいないと感じているし、確かに僕は兄さんを同じように愛しているからだ。<sup>45)</sup>

これはヤーコブがパリから帰国する直前に、ヴィルヘルムが送った最後の手紙である。兄弟の愛情の問題を考えるうえでは、離れ離れに過ごした最後の手紙において、ヴィルヘルムの側では兄の言葉が率直に受け止められ、このようなストレートな表現を見出していることも見逃されてはならないだろう。

### 3. ヤーコブ・グリムの非社交性の問題

#### (1)「引きこもり」というヤーコブ像の成立の背景

##### ①近親者と本人の証言から

引き続き、二人きりで部屋に引きこもって研究



をしていたという兄弟像について見ていこう。次に問題になるのは部屋にこもりがちであったという兄弟像である。これは兄弟二人ともというよりは、専らヤーコブにまつわるイメージである。共同生活の問題と同様に、このような性格づけの根拠になったものははっきりしている。兄弟自身の発言や近親者であるヘルマンの発言、そして身近な人などから発せられたものがそれである。

伝記的な資料のうち本人書いたものではないもので、ヤーコブの性格付けに大きく寄与したのは、ヘルマン・グリムの文章である。近親者であるヘルマンが残した記録は、伝記作家によって頻繁に利用されてきた。そのヘルマンが、あるところでヤーコブは「若い時分からむしろ引きこもり」<sup>46)</sup>と書いているが、これがその後のヤーコブ像に一定の影響を与えたと考えられる。後の伝記に目を向けてみると、例えばマルトゥスの伝記においても、学生時代のヤーコブに関して、「部屋にいる時がもっとも心地よく感じた」<sup>47)</sup>と述べられ、部屋で思索にふけることを好んだこと、友人と散歩に出るのを断ることがあった事実に触れられているのを見ることができる。

しかしながら、ヘルマンがこのような言い方をしたのは、ヴィルヘルムが好んで夜の会合に出席した、という前置きがあつてのことである。つまり、ここではヴィルヘルムの性格との対比でヤーコブの性格が説明されていることには注意が必要であろう。兄があけすけで、他方、弟は人当たりがよいといった性格描写のように<sup>48)</sup>、グリム兄弟の性格はこれまで対比して描かれ、まるで「一枚のコインの裏表」<sup>49)</sup>のように語られるのが常であった。兄弟自身が自分たちを語る際に、互いを明瞭に区別して語ったこともあるので<sup>50)</sup>、このような言い方になるのは無理のないことであるが、いずれにせよ紋切り型の性格描写には警戒すべきであろう。

次にヤーコブ自身の発言を見てみよう。1840年のラッハマン宛の手紙において、ヤーコブは、「交際や教育から学んだものは少なかった」と書き、「社交的な集まりがいつそう嫌いになった」

と述べている<sup>51)</sup>。後者の発言は、この発言の前にあるゲッティンゲンで起きた国外追放事件、いわゆる七教授事件のことを繰り返し聞かれるせいでそうなった、という内容があつて成り立つ文章ではあるが、「いつそう」という言葉が示すように、以前からパーティのような社交的な集まりが嫌いであつたということを表明しているのがわかる。もう一つ、ヴィルヘルムの追悼講演から関係する内容を引用してみよう。やはり弟と対比をしながら、自分自身の性質について語っている文章である。

仕事において自己のおもむくままにすること、仕事から目を上げて周囲を見回し朗らかになること、それらの喜びと安心が、弟には与えられていました。私を喜ばせ、快活にするのはまさにその仕事それ自体にありました。どれほどの夜を、深夜まで私は至福の孤独の中、本の上に身をかがめて時を過ごしたのでしょうか。弟は誰もが彼に喜んで会い、誰もが彼の愛らしい話の才能に耳を傾ける楽しい社交的な集まりにおいて、それらの夜を過ごしたのです。<sup>52)</sup>

弟が社交的に過ごしている間、自分は本を読むという「至福の孤独」の中にいたというこの発言は、裏を返せばヤーコブが非社交的で引きこもりがちであつたことを、この発言に当時接した聴衆や後の読者に想像させるのに十分なものであつただろう。彼自身や身近な人々の発言、ヤーコブの他人に対する姿勢や振る舞いを見ると、このような孤独な生活スタイルは、いつそう現実味を帯びて読者に現れてくる。すなわち、非社交性、没交渉、人嫌い、内向性といった性格付けをしたくなるようなエピソードにヤーコブは事欠かないのである。

## ②本人以外の証言から

次に本人や近親者以外の証言を見てみよう。1805年にパリでの文献調査に助手としてヤーコブを誘ったサヴィニーは、帰国してからは、ヤーコブと手紙でやりとりをしながら、再び文献調査な

どを依頼していた。そのような折り、帰国から1年半後の1807年3月9日に、ヤーコブから一通の手紙を受け取る。それはドイツの古い文学の研究をすることを決心したことを述べる手紙であった<sup>53)</sup>。それに対して、サヴィニーは以下のように返信をしている。

私の疑念は主として、いずれにせよあなたの性格においては、自らを人から隔て、引きこもろうとする明らかな性向、すなわち、それに精を出してしまうことが大変危険な性向があるという点に基づいています。毎日の実業の生活から絶縁し、そして自分の研究に人生を限定してしまうことによって、それは本当に手際よくなされてしまうことでしょう。<sup>54)</sup>

パリでの滞在期間、ヤーコブはサヴィニーの文献調査の仕事を手伝っていただけではなく、サヴィニー家と同居をしていたため、かなり長い時間をサヴィニーと一緒に過ごしていた。その一緒に過ごした経験から、サヴィニーはヤーコブの性格をこのように分析したのであろう。また、ヤーコブ自身もこの手紙に対する返答において、サヴィニーの指摘を正しいと認めているから<sup>55)</sup>、本人もそのように考えていたのだと思われる。

ところでヤーコブは、実際にはどの程度人付き合いを避け、引きこもっていたのであろうか。パリに到着してから3か月後の手紙で、「僕はこの大都市を熟知する努力をまったくしていない。それがなんの役に立ちうるのか。」<sup>56)</sup>と述べるように、ヤーコブは、それほどパリには関心がないことを告白している。とはいえ、すぐこの後に、旧市街についてはかなり詳しくなると述べ、リュクサンブール宮殿に絵画鑑賞に行ったことを述べているから、まったく外出していなかったというわけではないこともわかる。また、観劇に行こうというサヴィニーの誘いを何度か断ることがあり、これがサヴィニーの印象に残ったのかもしれないが、これは切り詰めた生活をしていたからだ、本人は弁明している<sup>57)</sup>。しかし、ある程度はパリの街

路を歩いたにせよ、また個別の事情があるにせよ、先に述べたように、ヴィルヘルムと交わした手紙においては本の話題が圧倒的に多いのは事実である。従ってヤーコブ自身が述べたように、頻繁に出歩くというよりは、部屋にいた時間の方が多かったように思われる。

あるいはこの点を考えるために、手紙においてフランス人の名前がほとんど出てこないという点に注目してもいいかもしれない。8か月半の滞在において、現地の住人であるフランス人とは、サヴィニー経由で知り合いも出来たであろうし、サヴィニーの助手として仕事をしている中で知り合うこともあっただろう。また、個人的な出会いもあったことは十分に想像される。帰国後にフランス人たちのあいだで秘書官を務めていることから、フランス語を身に着ける程度は、この時期にフランス人との交際があったことも推測できる。しかし、現存する手紙を読む限りでは、フランス人との交際があったようにはほとんど思えないほどである。フランス人が通俗的なことを話すさいに、さも大事のように話すとか、学識がないということなどを述べた、いわばヤーコブ流の「フランス人論」が、パリ滞在の最初の時期に語られたこともあるが<sup>58)</sup>、しかしこの場合も、「フランス人」という一般化した言い方で語っており、個人の名前が挙げられることはない。

これらのことから、サヴィニーの証言は、滞在期間全般を通じて、ヤーコブが人付き合いを避け、部屋に引きこもってドイツ文学の研究に没頭していたことが相当の事実であることをうかがわせるものである。

## (2) 社交の論争

### ①ヤーコブの物怖じする性格について

次にヤーコブの社交嫌いという点について検討してみたい。社交の問題については、ヴィルヘルムがハレに滞在していた時期に、兄弟の間で論争になったのを見ることができる。ヤーコブのパリ滞在による離れ離れの時期からおよそ3年半後、1809年3月31日に、ヴィルヘルムは悪化した持病

の肺と心臓の病気を治療するためにカッセルを離れ、ハレに至った。治療後はベルリン、ヴァイマルに立ち寄り、帰国したのは1810年1月初めであったから、ヴィルヘルムが不在だったのはおよそ9ヶ月間となる。この間に兄弟同士で交わされた手紙として47通の手紙が残されている。

以下、ヤーコブの非社交性の問題に関わる手紙を詳しく検討していこう。最初に取り上げるべきは、ヤーコブが現状を嘆いて、小規模の町で暮らしたいと述べた6月25日の手紙である。

僕と僕たちが暮らすのに2, 3000人の小さな町を望んでいる。僕がいずれどのような状態になるのかを知りたい。というのは、今は多くのことがあまりにも嫌で、このままではいられないだろうからだ。自分の方ではまったく落ち着いているのはあるけれども、僕はそのことを自覚をしているのだ。もし神様が十分に与えてくれ、お金を稼ぐような職務に依存せずに、世間的には中庸な生活を送ることができたのならいいのだが！<sup>59)</sup>

ヤーコブが「多くのことがあまりにも嫌」だという発言に至った背景として、この時期のヤーコブには、仕事に対する不満があり<sup>60)</sup>、家庭内での弟妹との不仲状態があり<sup>61)</sup>、そして、知り合いたちとの交際の負担など、多くの問題を同時に抱えていたという状況がある<sup>62)</sup>。これらの問題の中では、知り合いとの交際に関する事柄が、ヤーコブの非社交性の問題と主として関わっていくので、ここではそれを検討することにしたい。

ヴィルヘルムが旅立った当初、ヤーコブは隣家のヴィルト家、あるいはランドレ家、そしてヨルディス家などを積極的に訪問し、一定の社交的な生活を送るよう努めた。マルトゥスが指摘するように、好んで人付き合いをしないヤーコブにとって、このことは「社会的実験」<sup>63)</sup>ともいえる試みであった。しかし、上の手紙に続く7月10日の手紙では、ヤーコブは、ヴィルト家やランドレ家の人々から誘われてパーティなど、何度か出てはみたものの、「心底嫌になった」<sup>64)</sup>と述べており、

この交際がかなりの心理的な負担になっていたことがわかる。このような状況に至ってヤーコブは、自身の非社交性の問題について、そして社会で行われている人々の交友、すなわち社交の問題という、二つの問題について自身の考えを述べることになる。6月末から7月末の1か月間にやりとりをした手紙において、このことが話題になるが、ヤーコブはこの二つの問題について同時に語っているので、以下、この二つの問題を切り分けながら、整理して見ていくことにしよう。

まず、ヤーコブの非社交性の問題については、以下の引用から見てみよう。先に挙げた「心底嫌になった」に続く文章である。

僕は最初は常に人の輪に入りたいという気持ちがあり、そしてその単調さや空虚さに後になってから気がつくのだが、その前までしていた隠遁生活のせいで、最初はそうは考えないのだ。従って、僕自身のお人よしから、そしてその人たち自身がいかにお人好しであるかがわかるので、僕は自らに参加を無理強いする結果になるのだが、結局最後には、この無理強いすることはなくなってしまい、すべてが再び元の本阿弥となって終わってしまうのだ。何か正しくないことがその中には潜んでいて、そしてそのさい僕は自分の落ち度をまったく自覚していないわけだから、僕に合った人というのはいずれにせよいるものだろう。ただ問題なのは、そういう人たちを見つけることなのである。もしかしたら別の場所にいるかもしれない。<sup>65)</sup>

これからわかるのは、ヤーコブ自身は「人の輪に入りたい」と考えていることである。つまり、ヤーコブは人と交際することをむしろ望んでいるということになる。にもかかわらず、実際に人と交際をしてみると、「単調さや空虚さ」を感じ、そこから何も得ずに終わってしまうのだという。ヴィルヘルムはこれを受け、ヴィルト家やランドレ家たちの人々は良い人たちだが平凡で、すぐに退屈に感じてしまうだろうということ、そして、ヤーコブは何か目的なしで、ただそこにいるという

ことは出来ないという分析をしている<sup>66)</sup>。ではどうしたらいいのかというと、ヤーコブは自分のどこが悪いかわからないので、自分に「合った(recht)人」を見つけるしかないという、都合のよい考えに至っている。しかしこれに対してヴィルヘルムは、ヤーコブがサヴィニーのような親しい人たちのところでも、容易に訪問しようとしなかったことを指摘し<sup>67)</sup>、自分以外にヤーコブに合う人間はいないだろうと断言することになる。

このヴィルヘルムの反論を受け、ヤーコブは次の手紙において、あらためて自分の行動と思考について分析をしている。そこではヤーコブは、散歩を例にとり、誰かと一緒にいると、自分の思考がもう一人の思考を妨げ、その逆も起きてしまうことを述べている。そして、ヤーコブには「物怖じ」があって、たとえ自分が「好きな人」に対しても、何でも話すことができないとも述べている<sup>68)</sup>。「好きな人」とは、ここでは例としてサヴィニーが想定されていると見なしてよいが、ヤーコブの言う「合った人」とは、厳密に一致しないのかもしれない。しかし、これらのヤーコブの物言いからまとめてみると、結局は、たとえヤーコブに合った人／好きな人であっても、相手の思考を過度に意識してしまい、また、物怖じをしてしまうので、様々なことを語り合うことができないということになる。だとすると、結局ヤーコブは、ヴィルヘルム自身が述べるように、ヴィルヘルム以外の第三者に対するいかなるコミュニケーションの試みもうまくいかないということを言っていることになるが、それは正しいのであろうか。

## ②ヤーコブの社交についての考え方について

この点についてもう少し検討するために、もう一つの問題である社交の問題について詳しく見ていこう。ヤーコブは自分自身の非社交性の問題を語る中で、世間一般で行われる交友の習慣、すなわち社交の問題へと議論を展開している。以下は、先の「物怖じ」について書かれた手紙と同じ、7月19日の手紙からの引用である。

そして現代の社交のあり方とまでは言わないが、あの奇妙な社交のありかたは、どこか不自然なものではないだろうか。というのは、数百年前までは、それは絶対に違ったものであったのだから。<sup>69)</sup>

ヤーコブは、現代の社交という言い方で一般化をすることを避けつつ（とはいえ、厳密に区別されているわけではないが）、自分の周囲で行われている社交のあり方に対して、「不自然」だと捉えているのがわかる。この「奇妙な社交」は、かつて行われていた社交とは対照的に語られ、相対化されるものである。この二種類の社交のありようについて、この先の文章では、さらに説明がされている。まず、この現代に行われている「奇妙な社交」については、以下のように雑誌のアナロジーで説明される。

僕は、面白い人のところへお茶会に行くのは理解できる。そしてこの現代の風習が、僕には現代の雑誌のように思える。それは良いもので便利で、しばしば中断する記事があるものであるが、しかしそれは本当の本ではないのである。必然的に多くの悪いことや賤しいことが起き、僕たちはそれに慣れてしまうことはできるが、そういったものは、どうしてもなくてはならないものでもないのだ。<sup>70)</sup>

ヤーコブの見方によると、当時行われていた茶会という形での会合は、便利で楽しい雑誌のようなものであるものの、雑誌が本に値しないように、本来的な意味での「集い」ではないということになる。とすると、古いスタイルの集いが本当の集いだと言いたいのだろうが、具体的には何を指すものだろうか。続く文章を読むと、その集いは「人間と同じくらい長く存在するもので、たとえそれが悪いものであっても、僕は喜んで行くだろう」と述べられ、具体的には「公の娯楽、遊び、お祭り」<sup>71)</sup>のことだと述べられる。例からわかるように、人間が集団で生活を営み始めた時から存在したであろう共同体での様々な人と人との交流

の機会が、ここでは念頭に置かれているのがわかる。ヤーコブはこのような古いスタイルの集いを美化しているが、しかし、実際にどれだけ参加する気があったのかは、ヴィルヘルムがその返答で、かつてヤーコブがこれまでそのような集まりに参加してこなかったことを批判的に述べているのを見ると<sup>72)</sup>、疑わしいものである。その点から考えてみると、むしろここでヤーコブが言いたいことは、ヴィルト家やランドレ家を通して参加したような当世風の茶会といった、社交を目的として集まるのがよいことだとは思えないということではないだろうか。

従って、「どうしてもなくてはならないものでもない」という発言からわかるように、ヤーコブは人と会うのに必然性を要求することになる。そして、その必然性のためには、ヴィルヘルムがヤーコブは何かを目的がないといられないと指摘したように<sup>73)</sup>、そもそも何のためにその人に会うのか、という目的が重要になってくる。ではヤーコブが人と会う必然性の根拠となる、その目的とは何であるというのか。文章は前後するが、7月19日の手紙の「奇妙な習慣」に続く文章では、以下のような内容が述べられている。

そして今のように、ただ時間と欲求を奪うために、人は互いに座っていたのではない。僕は自分が好きで、その人も僕のことを好きな人以外のところへは行きたくない。何かをしゃべるため、あるいは何かを彼から学ぶためではなく、その人のもとにいるために行くのだ。その後、他のことが与えられるのだ。<sup>74)</sup>

人になぜ会うのかというと、その人に会うために会うのである。そして、おしゃべりをしたり、何かを得たりするのは、その結果生じるものにすぎない。従って、先に問題になっていた、ヤーコブが物怖じをするゆえに交際がうまくいかないという問題は、ここで解消されることになるだろう。ヤーコブの理屈で言えば、たとえヤーコブが「物怖じ」であるゆえに、会っている人とまったく話

をしなくてもかまわないのである。なぜなら、会うことを目的とした集いでは、自分の好きな人のもとで一緒に時間を過ごすことが重要だからである。

このヤーコブの言う理想の交際のあり方と、第2章で取り上げた理想の書斎のあり方を合わせて考えてみると、ヤーコブが想定していたのは、まずヴィルヘルム、そして次にヤーコブが会いたいと思う人がいる書斎という、ある種の理念的な空間であるということがわかる。その書斎の本棚には選りすぐりの美しい蔵書が整然と並び、そこにヤーコブは彼らと静かに佇むのである。ヘルマンがくしくも二人の書斎には「聖なる静寂」が支配していたと述べたように、ヤーコブが語っていたのは書斎の静寂のユートピアだったと言えるだろう。

#### 4. おわりに

以上、グリム兄弟の共同生活の問題について、そしてヤーコブの非社交性の問題について、検討をおこなった。その結果、グリム兄弟と一緒に暮らそうと考えたことは、兄弟愛というキーワードで読み解くだけでなく、彼らの本への欲求も重視する必要があるということ、また、ヤーコブの引きこもりの問題は一定の事実ではあるものの、それは人嫌いであるといった理由ではなく、物怖じをするというヤーコブの性質と、喋らなくても良いという社交に関するヤーコブ独自の考え方があったからということが明らかになった。加えて、伝記作家たちは、兄弟の実際の発言や振る舞いを踏まえ、二人の性格描写を行っているものの、二人の性格を際立たせるために、紋切り型の性格描写に陥るという危うさも確認することができた。ただ、こちらの点についてはこれまで出版された伝記のそれぞれについて、もう少し厳密な分析が必要であることは付言しておきたい。

また、この共同生活及び引きこもりの問題については、さらに別の観点からも検討が必要と思われる。というのは、グリム兄弟はそれぞれ旅行をよく行い、実際は何度も「離れ離れ」になってい

たという事実があるということ<sup>75)</sup>、また30,000通とも言われる残された兄弟発の手紙の量や<sup>76)</sup>、いわゆる後の「グリム童話集」や「伝説集」の成立につながるドイツの古い文学を提供するよう、多くの知り合いに広く呼びかけたことなど、兄弟が世間一般の人と同じように多くの知り合いを持ち、独自のネットワークを築いていたという事実があるが、これらの事実が兄弟の性格と関連付けて語られることが、これまであまりなかったということは注意されなくてはならないだろう。グリム兄弟像は、彼らが残した記録、他人の記録、そして伝記作家たちの記録、そしてそれらの解釈など様々な場において揺れ動くことになるが、それらをそれぞれ厳密に見ながら関連付けていく必要があると言えるだろう。

## 注

1) 拙論「グリム兄弟の自伝的記録と書簡について」『駿河台大学 論叢』(第50号, 2015年7月)所収, 204頁。

2) Heinz Rölleke (Hg.): Briefwechsel zwischen Jacob und Wilhelm Grimm. Teil 1 Text. Stuttgart: Hirzel 2001, S. 124. [Briefwechsel der Brüder Jacob und Wilhelm Grimm. Kritische Ausgabe in Einzelbänden. Bd. 1. 1.] 本論で引用される手紙は、このハインツ・レレケによる『ヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリムの往復書簡集』(通称「批判校訂版」)を用いている。なお本論で使用した1805-1809年の期間に出された手紙の翻訳としては、以下の山田好司によるものがあり、適宜こちらも参照した。ただし、これはヘルマン・グリムとグスタフ・ヒンリクスが編集した書簡集を底本にしており、レレケによる批判校訂版にあるすべての手紙が訳出されているわけではない。山田好司訳『グリム兄弟自伝・往復書簡集—ヤーコプとヴィルヘルムの青年時代』(本の風景社, 2002年)及び『グリム兄弟自

伝・往復書簡集—ヤーコプとヴィルヘルムの青年時代 第2巻』(本の風景社, 2003年)。Vgl. Herman Grimm u. Gustav Hinrichs (Hg.): Briefwechsel zwischen Jacob und Wilhelm Grimm aus der Jugendzeit. Weimar: Hermann Böhlau Nachfolger 1963 [Zweite, vermehrte und verbesserte Auflage von Wilhelm Schoof].

3) Jacob Grimm: Selbstbiographie. In: Karl Wilhelm Justi: Grundlage zu einer Hessischen Gelehrten-, Schriftsteller- u. Künstler-Geschichte vom Jahre 1806 bis zum Jahre 1830. Marburg 1831, S. 151. (Reprint); vgl. auch ders.: Selbstbiographie. In: Kleinere Schriften 1. Hrsg. v. Karl Müllenhoff. [Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Berlin 1864]. Hildesheim: Georg Olms Verlagsbuchhandlung 1965, S. 4.

4) Jacob Grimm: Rede auf Wilhelm Grimm. In: Jacob Grimm: Kleinere Schriften 1, S. 166f.

5) Rölleke: a. a. O., S. 30.

6) Carl Zuckmayer: Die Brüder Grimm. Frankfurt a. M.: Suhrkamp 1948, S. 8.

7) 例えば、グリム一家の母方の祖父は、グリム兄弟が父親の死後、カッセルのリュセーで学ぶことになった時の1798年10月に、以下のような激励の手紙を送っている。「お前たちが何ゆえに今の場所にいるのか、お前たちの最終目標に思いを致すこと、つまり、授業時間内でも外でも勤勉さを発揮するということは、いくら言っても足りないだろう。そうして将来の繁栄を築き、名誉を獲得し、そして母、私、そして家族全員を喜ばしてほしいのだ」。Dieter Hennig u. Bernhard Lauer (Hg.): 200 Jahre Brüder Grimm. Die Brüder Grimm. Dokumente ihres Lebens und Wirkens. Kassel: Weber&Weidemeyer 1985, S. 171.

8) Rölleke: a. a. O., S. 86.

9) 確かに兄弟は生涯同居し続けたが、例えば遠出、旅行、研究旅行、仕事上の出張などの様々な

理由で、また期間も短いものから長いものまでを含み、何度も「離れ離れ」になっている。兄弟の旅行についてまとめた本格的な論考は今後の研究を待たなくてはならないが、若い時代の旅行に関しては以下の短い記事がある。拙著「グリム兄弟の足跡をたずねて—グリム兄弟と旅行」『子どもと昔話』(第 67 号, 2016 年) 所収, 16-17 頁。

<sup>10)</sup> Zuckmayer: a. a. O., S. 9.

<sup>11)</sup> Gabriele Seiz: Die Brüder Grimm : Leben - Werk - Zeit. München: Winkler 1984, S. 12f. ガブリエーレ・ザイツ『グリム兄弟 生涯・作品・時代』, 高木昌史, 高木万里子訳, 青土社, 1999 年。

<sup>12)</sup> Herman Grimm: Die Brüder Grimm und die Kinder- und Hausmärchen. In: Herman Grimm: Beiträge zur Deutschen Culturgeschichte. Berlin 1897, S. 214-247, hier S. 216.

<sup>13)</sup> Steffen Martus: Die Brüder Grimm. Eine Biographie. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag 2013, S. 101.

<sup>14)</sup> Ebd.

<sup>15)</sup> Rölleke: a. a. O., S. 70. また、このライブチヒの見本市カタログについては、以下を参照。Stephan Bialas-Pophanken (Verf. u. hg.): Briefwechsel der Brüder Jacob und Wilhelm Grimm. Kritische Ausgabe in Einzelbänden. Bd. 1. 3. Teil 3 Kommentar. Stuttgart: Hirzel 2013, S. 55f. [Briefwechsel der Brüder Jacob und Wilhelm Grimm. Kritische Ausgabe in Einzelbänden. Bd. 1. 3.]

<sup>16)</sup> Rölleke: a. a. O., S. 86.

<sup>17)</sup> Ebd.

<sup>18)</sup> ヤーコブがマールブルクに入学した 1802 年に、カッセルの学友パウル・ヴィーガンとやりとりをした手紙では、文芸に関する内容が話題の多くを占めている。ただしそこに挙がっている作家たちを見ると、どちらかといえば彼らの同時代の作家や、少し前の時代に活躍した作家が多く、また、文学史には名前が残らないような騎士道文学や当

時の流行作家、大衆向け文学なども含まれていることがわかる。こうしたいわば通俗的な趣味は、パリ時代には後退し、規範的な文学や古書などが話題の中心となる。Edmund Stengel (Hg.): Private und amtliche Beziehungen der Brüder Grimm zu Hssen. Bd. 3. Briefe der Brüder Grimm an Paul Wigand. Marburg: Elwert 1910. Vgl. auch Bialas-Pophanken: a. a. O., S. 35 u. Ludwig Denecke u. Irmgard Teitge (Erarbeitet) u. Friedhilde Krause (Hg.): Die Bibliothek der Brüder Grimm. Weimar: Böhlau 1989, S. 9-11. なおグリム兄弟のマールブルク大学入学初年度からパリ滞在時期までの読書の趣味の変遷については、以下の二つの短い記事がある。拙著「グリム兄弟の足跡をたずねて 学生時代—読書」『子どもと昔話』(第 37 号, 2008 年) 所収, 14-15 頁。拙著「グリム兄弟の足跡をたずねて ヤーコブのパリ滞在(5)」『子どもと昔話』(第 47 号, 2011 年) 所収, 21 頁。

<sup>19)</sup> Hennig u. Lauer: a. a. O., S. 182f. u. Rölleke: a. a. O., S. 29.

<sup>20)</sup> Vgl. Rölleke: a. a. O., S. 39-41.

<sup>21)</sup> Ebd., S. 91. もしくは「僕たちのすばらしい蔵書」。Ebd., S. 42.

<sup>22)</sup> Ebd., S. 46.

<sup>23)</sup> Ebd., S. 67.

<sup>24)</sup> Ebd., S. 93.

<sup>25)</sup> 例えばヤーコブの手紙での発言として、「入手しただろうか」、「すぐに買わなくてはならないだろう」、「買えるところで買わなくてはならない」、「入手してほしい」、「すぐを買うべきだ」、「入手していないのか」などが見られる。出典は前の発言から順に以下の通り。Ebd., S. 42, 46, 53, 59, 70 u. 87. ヴィルヘルムの発言としては「買いたい」、「買うべきか」、「買うのを留保した」、「買った」、「まだ受け取っていない」などがある。Ebd., S. 50, 77, 81, 91 u. 92.

<sup>26)</sup> Ebd., S. 42f.

<sup>27)</sup> Denecke u. Teitge: a. a. O., S. 10f.

28) Ebd., S. 15.

29) Rölleke: a. a. O., S. 77.

30) Ebd., S. 92.

31) 兄弟は本に使用する紙についてもこだわりがあり、ヤーコブは本に合う紙をパリで見つけ、前もって一部をヴィルヘルムに送り、それから持ち帰るということをしている。Vgl. Ebd., S. 68f u. 89.

32) Stengel: a. a. O., S. 12.

33) Martus: a. a. O., S. 79.

34) Jacob Grimm: Das Wort des Besitzes. Eine linguistische Abhandlung. In: Jacob Grimm: Kleinere Schriften 1. Karl Müllenhoff (Hg.) Hildesheim: Georg Olms Verlagsbuchhandlung 1965, S. 113-144, hier S. 115f. [Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Berlin 1864].

35) 「誰かが彼〔ヤーコブ〕のところで本を探して、すぐにその本を見つけられないとき、飛び上がってその本を自ら手渡すのは彼の喜びだった。私の父〔ヴィルヘルム〕の死後、父の部屋を書庫にすると、彼は新しい計画に従って本を並べ、本の置き換えをすべて一人でやった。暗い中で彼は間違えることなく、あらゆる本を取ることができた」。Herman Grimm: Anhang zu Jacob Grimms Rede auf Wilhelm Grimm, gehalten in der Akademie der Wissenschaften den 5. Juli 1860. In: Jacob Grimm: Selbstbiographie. In: Kleinere Schriften 1., S. 178-187, hier S. 184. 「付録 ヤーコブ・グリム「ヴィルヘルム・グリムをしのぶ講演」への付記（晩年のグリム兄弟回想記）」、『ヴィルヘルム・グリム小品選』（山田好司訳、本の風景社、2012年）所収、94-95頁。

36) Vgl. Alfred Höck: Die Brüder Grimm als Studenten in Marburg. Marburg: Elwert 1978, S. 25f.

37) Hans-Georg Schede: Die Brüder Grimm. Biographie. Hanau: CoCon Verlag 2009, S. 34f.

38) Martus: a. a. O., S. 79-83.

39) Rölleke: a. a. O., S. 52.

40) Bialas-Pophanken: a. a. O., S. 46f.

41) Herman Grimm: Anhang zu Jacob Grimms Rede auf Wilhelm Grimm, S. 94.

42) Rölleke: a. a. O., S. 75.

43) 例えば「ゲーテの古いものとどう取りかかるか、ドイツで君と話したい」（7月12日の手紙）。あるいは「僕はどの手紙でも、本を一冊、購入するよう提案をしなくてはならないようなので」（4月21日）。Ebd., S. 86 u. 67.

44) 「見本市カタログに関して言えば、兄さんとほとんど同じ本を取り上げたことが嬉しかった」Ebd., S. 76.

45) Ebd., S. 93.

46) Herman Grimm: Anhang zu Jacob Grimms Rede auf Wilhelm Grimm, S. 185.

47) Martus: a. a. O., S. 61.

48) Ebd., S. 151.

49) このようにマルトゥスはグリム兄弟を対比して類型化しているものの、そのように互いに性質が違い、考えも異なる兄弟が、論争を通じてその違いを克服したという点に、近代的な人間関係のあり方を見ており、この点で興味深い議論を提供している。Ebd. u. vgl. auch Einleitung 11.

50) 例えば「好みと才能が弟と私では互いに対立しており」。Vgl. Jacob Grimm: Rede auf Wilhelm Grimm. In: Jacob Grimm: Kleinere Schriften 1., S. 163-187, hier S. 174. 翻訳は以下の通り複数ある。寺岡壽子「ヴィルヘルム追悼講演」、『ドイツロマン派全集 第15巻 グリム兄弟』（小澤俊夫、寺岡壽子、原研二、堅田剛、谷口幸男訳、国書刊行会、1989年）所収、139-158頁。山田好司「ヴィルヘルム・グリムをしのぶ講演（1860年）」、『グリム兄弟自伝・往復書簡集』（山田好司訳、本の風景社、2002年）所収、75-106頁。

51) Herman Grimm: Anhang zu Jacob Grimms Rede auf Wilhelm Grimm, S. 182.

52) Jacob Grimm: Rede auf Wilhelm Grimm, S. 172f.



53) Wilhelm Schoof (Hg.): Briefe der Brüder Grimm an Savigny. Berlin: Erich Schmidt Verlag 1953, S. 28-30.

54) Adolf Stoll: Der junge Savigny. Berlin: Carl Heymann 1927, S. 305.

55) 因みに、ヤーコブはこの指摘を認めたうえで、現在の家庭の経済状況では、自分が働かないわけにはいけないので、研究に引きこもることはないと答えている。Schoof: a. a. O., S. 31.

56) Rölleke: a. a. O., S. 54.

57) Ebd., S. 40.

58) Ebd.

59) Ebd., S. 137.

60) ヤーコブはフランスの傀儡国家であるヴェストファーレン王国の首都カッセルにあって、1808年以来、ジェローム王の私設図書館の司書として、また翌年には参事院の法務官も兼任して、フランス人の間で働いていた。いずれの仕事もそれ自体は負担ではなかったが、ヤーコブは生活をするためにお金を稼ぐということにそもそも否定的であり、「特定の平穏さ、家庭的なことから出るものはおしなべて墮落」と考えていた。Ebd.

61) 同居していた弟のフェルディナント、カールの二人と、妹のロッテら弟妹とヤーコブの関係は、ヴィルヘルムの不在以降、次第に悪くなっていった。例えば、5月3日の手紙においてヤーコブは、「僕が彼〔フェルディナント〕に何かしら最低限のことを働きかけることなしには、今では彼は僕とは一言もしゃべらない。カールも喋らなくなった。ただロッテだけ昔のように喋る」と述べ、続く5月17日の手紙では「他の弟妹たちとは日毎に悪い状態になっている。僕にその責任はまったくない」という発言が見られる。Ebd., S. 117 u. 124.

62) マルトゥスは、ヤーコブがこの時期に仕事、知り合い、そして家族について不愉快に感じていたことについて、「ヴィルヘルムがいる限り、彼はそれに耐えることができた。しかし今やその弟がいなかったのである」と述べ、ヤーコブが抱え

た問題は、ヴィルヘルム不在のために起きたものと見なしている。Martus: a. a. O., S. 150.

63) Ebd., S. 149.

64) Rölleke: a. a. O., S. 142.

65) Ebd.

66) Ebd., S. 146.

67) 「サヴィニー、ベッティナーなどがいれば、おそらくいくらか良いだろうが、多くをもたらすことはないだろう。彼らが以前、一度そこにいたことがあったが、すぐに辞去するというのを僕と前もって決めておかない限り、兄さんは決してその場に行こうとはしなかった。そして様々なことから、その理由を挙げていた。」Ebd.

68) Ebd., S. 148. なお、この後に「書くことは好きだ」と続くことから、話すのは得意ではないが、書くことによって、ある程度は話したいことを伝えることができるとヤーコブは考えていることがわかる。

69) Ebd., S. 147.

70) Ebd., S. 148.

71) Ebd.

72) 「それに劇場、花火、遊園地などといった公的な娯楽では、兄さんは一度たりとも楽しみを見出しはしなかったではないですか。」Ebd., S. 150.

73) 注 66 参照。

74) Rölleke: a. a. O., S. 147.

75) 注 9 参照。

76) 拙論「グリム兄弟の自伝的記録と書簡について」、前掲書、206-207 頁。